

## 認定監理技師制度への 期待と要望 —その7—

論説

自ら「都市ゲリラ」を名乗り、建築で闘い続ける男、安藤忠雄を知らない人はほとんどいないと思います。

彼は、17歳でボクサーとしてプロデビュー。しかし、当時の大スター、ファイティング原田の練習を見て自分の才能に見切りをつけ、独学で建築を志したそうです。

だが、当然ながら仕事など全くなかったそうで、依頼がなくとも他人の土地で勝手に構想を練り、設計図を描く毎日だったそうです。そして、批判を浴びたデビュー作の「住吉の長屋」が1976年に登場します。

間口2間、奥行き7間の住宅。彼はその住宅を3等分して真ん中の3分の1を中庭にしたそうです。居間・食堂と寝室・子供部屋は屋根のない中庭で隔て、雨の日は傘をさして移動しなければならない住宅でした。当然、「住みにくい家」との批判の声がありました。それに対する彼のメッセージは強烈で明確でした。

『住まうとは、ときに厳しいものだ。私に設計を頼んだ以上、あなたも闘って住みこなす覚悟をしてほしい』 — 家を建てたという人が来たときに、私はこのように説明する —。

「40年間私はずっと言ってきた。家が寒いならシャツを1枚着ればいい。まだ寒ければもう1枚。家が使いにくいなら住む人が体力をつけなさいと。最近では家の中の温度がいつも一定とか、極端な例だと家の外から遠隔操作で風呂を沸かすとか、家がそんなに便利になってどうするのかと思う。住まいとは、自分で考え、工夫して使いこなすもの。今でもその考えは変わらない」

また、彼は著書の中で「私は、人間にとって本当の幸せは、光の下にいないことではないと思う。その光を遠くに見据えて、それに向かって懸命に走っている、無我夢中の時間の中にこそ人生の充実があると思う」と述べ、「この不況の時代、光はなかなか見えないけれど、それでも光は自分で探さないといけない。20代の時に吉川英治の『宮本武蔵』を読んだが、内容はよく分からなくても“生きるということは覚悟することだ”ということだけはよく理解できた。宮本武蔵という人は真剣勝負でしか闘わなかった。常に死と隣り合わせの覚悟の中で生きていたからこそ、後世まで語り継がれる剣豪となった。

覚悟さえあれば、建築でもどんな分野でもある程度のレベルまでは行ける。勿論、その上へ行こうと思えば才能や独創性が必要だ。しかし、今の日本人にはまず徹底的に覚悟が足りない。かつて日本人が持ち合わせていた闘争心と緊張感、そこから生まれる大胆な発想を少しでも感じ取って貰えたらいいと思う」

草食動物が増殖するこのご時世、とても耳の痛い話に聞こえるのは筆者だけなのでしょうか？桜花爛漫の頃から、私たちにも覚悟が必要となるかもしれない。

### ■ 動き始めた検討会

前号で「筆者の任期も残り僅かになりました。この稿を書き進めるうちに検討会が議論を深め、単なる研修会とは異なるこの制度の骨格を具体的に提示してくれるものと期待していましたが、残念ながら今日に至るまで何の進捗もありませんでした」と書いた途端、1月21日に認定総合監理技師制度検討WG会議が開催されました。

会議の冒頭、米坂委員長より、これまでの経緯と検討WG立ち上げの説明があり、「あり方報告書(平成20年5月1日)を参考にすが、これにとらわれず意見を出して欲しい。年度内にこの制度の骨格を作り上げたい」との力強い決意が表明されました。

### ■ 宿題方式、3回の会議で成案を得る

第1回会議は上級監理技師のあり方に議論が集中しました。会議録によれば、主な議論は以下の通りでした。

- 今後のスケジュールとして3月までに方向性をまとめる。
- あり方報告書を読むと、当初議論されていた監理技師制度と違う。認定の目的を明確にしないと受講者、受験者の誤解を招くのではないかと。「認定」という名称はやめた方が良いのではないかと。
- 今までおこなってきた育成は、人財ではなく技術者の育成であった。
- 以前の答申書は、検査部長や副院長を目指す為の内容ではないかと。目的を変えた方が良い。
- 個人の目的も重要であるが、組織(日臨技)としての目的も盛り込むべきである。
- あり方報告書の目的は、How Toものの初級に対する目的だ。究極の目的を作るべきである。人財の発掘と組織作り。国民への臨床検査の啓発。臨床検査をツールにして、臨床検査の文化を創るような気概、世の中を動かすくらいの気概が必要だ。
- 初級は、上級を受けるための資格と位置付け、例題問題を解くようなレベルでも良いのではないかと。上級は、応用問題を解く能力を問うレベルを求めるものであるから、教える、教わるということではなく、自ら問題・課題を提起し、仮説を提唱できなければだめだ。
- 上級は、SpecialなGeneralistの育成ではないのか。経営の上級や、マネジメントの上級があっても良いのではないかと。
- 上級は、答えの無い問題を解ける能力、問題を見つけそれを解ける能力を問うべきではないかと。
- 意識付けではなく、自己判断、自発的、自己啓発を問うものである。面接試験で、試験官をやり負かすくらいでなければだめだ。
- 自分の意見や考えを人に伝え、教えられる能力、教育の仕方や教育現場の経験(教授力)も盛り込んだ方が良いのではないかと。
- 受験対象者はどうするか。日臨技生涯教育履修と会員歴は必要かもしれないが、特に制限する必要はないのではないかと。
- 受験者数を問うような資格ではない。日臨技会長は上級が取得できる人が望ましい。4年に一人でも良いのではないかと。
- 名称は、初級認定監理検査技師と上級監理検査技師(認定を外す)にしてはどうか。
- 初級を日臨技理事の要件にしてはどうか。
- 委員全員が、改めて初級、上級の目的、それぞれの到達目標ならびにそのコース、基本的な考え方、到達目標のキーワードなどを第2回会議までに考える。

以上の結果、呼称については、従来初級と称していたものは「初級認定監理検査技師」、上級と称していたものは「上級監理検査技師」となる模様です。

初級は幅広い分野の学習を主体として、到達度の検定を以って認定される見込みです。カリキュラムは、あり方報告書で提言された内容に何教科かを加え、放送大学で単位取得できる科目はそれを利用して代替し、法・経・商学系統の大学ですでに該当科目の単位を取得済のものは単位取得証明書を以って認定するなど合理的な運用を望みたいものです。

5万人の会員を背景にした臨床検査のスーパーマン育成の第一歩が踏み出されました。皆でその成り行きを見守り、成案を得た後にパブリックコメントを山のように浴びせましょう。

【金子健史】